

「官民あげて「働き方改革」が叫ばれる中、企業側と労働者側の関係が一筋縄でいかないのが実情だ。その両者のバランスを取り持ち、解決の道を見出す道標として労働法がある。弁護士法人アクシスの代表、金森将也弁護士に企業と働き手が気持ちよく働ける職場づくりについて語った。

「ゲートキーパーとして役立ちたい」。

金森弁護士が強い口調で切り出した。ゲートキーパーとは、自殺の危険を示すサインに気づき、適切に対応する人のことだ。特別な資格があるわけではなく、一般に「命の番人」と訳され、国内外で自殺対策の分野で広く使用されている用語であり、概念なのだ。WHO（世界保健機構）などでも使われ、養成プログラムも用意されている。金森氏が若い経験語る。「ゴルフをしたり、遊んでいた仲のいい同級生が自殺をしました。友人が自殺を決意するほど深刻に悩んでいるとは全く気付かなかった。私がつと早く友人の悩



弁護士法人アクシス 金森 将也弁護士

企業と働き手の 信頼を築く

みに気付き、声を掛けていたら自殺という痛ましい結果は避けられたと思います。忸怩たるものが今でもあります」

三重県出身の同氏は「悩みから人を救う」「自殺を防ぐ」といった高い志を持って法律の道に入ったわけではない。「高校卒業時は就職氷河期でした。これは何か資格があった方がいいだろう。もともとコンサルタントには興味があつたので上智大学法学部に進みました。幸い在学中に司法試験に合格しました」。

とんとん拍子の社会人スタートに親も舌を巻いたという。

「両親はともに公務員で、同じ公務員かそこその企業に勤めて欲しいと考えていたみたいです。司法試験を目指すと聞いたときはびっくりしていました。『何年かかっても試験に受からなかったらどうする』としつこく迫られました。裁判官や弁護士は両親にとつて雲の上の存在に映っていたんでしようね。私もつい『納得できるまでやらして欲しい。絶対合格する』とミエを切つての司法試験挑

戦でした」

大学卒業後、司法研修を経て弁護士登録、そして二〇〇三年に名古屋市内に法律事務所を開設した。中心軸を意味する現在の「弁護士法人アクシス」に改名したのは一五年のことだ。「軸のブレない良質なリーガルサービスの提供」（金森弁護士）という意味が込められている。業務の多くは企業との顧問契約によるものだが、企業の法的問題は企業同士だけでなく労使間、職場での社員同士のトラブルなど広範にわたり、しかも複雑化しやすい。企業と顧問契約を交わしているとはいえ、企業側の一方的な利益だけを主張しても解決することは少なく、むしろ労使問題にはそうしたケースが多いという。企業、働き手の両者が利益を得られるような解決策を見つけていく努力が求められるのだ。最近、増えている相談が長時間勤務やセクハラ、パワハラなどだ。金森弁護士は対策に内部通報制度の設置を提案する。

内部通報制度とは、長時間労働やパワハラなど社内での理不尽な

行為があつても一般社員は親身になつて相談できる相手がいない。

そのための専門の相談窓口やホットラインを制度化することだ。「長時間労働やパワハラなどが社会問題化すればブラック企業のレッテルを貼られ企業の損失は計り知れません。そうならないためにも企業にアドバイスし、職場環境の健全化に努力するよう勧めています。結果、働く側も幸せになります」

悩まされるモンスター社員 評価基準で対応か…？

ところがこの労使の信頼を裏切る輩に金森弁護士は頭を悩ます。「モンスター社員」だ。「仕事はしないし、できない。そのくせ他の

社員に文句ばかり言つて職場の雰囲気悪くする。注意すると権利を主張する。退職勧告や配転もできない。どうしようもないけど、企業側と相談して対策を練っていくしかありません。そんなモンスター社員に限って残業代などを多めに請求してきます」。

かつて高度成長時代を突っ走り、サービス残業当たり前の意識込みで企業を支えた団塊世代にすれば「不屈者」のひとつも浴びせたくなるだろう。労働環境、勤務体系などが大きく変わり時代錯誤があるかもしれないが、増殖するモンスター社員は、企業にとつても、金森弁護士にとつても大きな問題になっているという。

「仕事のできる社員は時間内で仕事を片付け、中身もまとまってる。それに対しモンスター社員は能力の差が歴然としていることが多い。企業側も勤務実績の評価方法を改めるしかないと思う。例えば日報みたいなものを毎日提出させ、残業の身をチェックするとか。そして、その結果は賞与や昇給、昇進に反映させればいいと

思う。労働法では違反になりません。しかし、毎日大量の日報を詳細に精査することは現実的でないように思い、正直、特効薬がないのが実情です」。

金森弁護士は、企業側の立場とはいえ、顧問契約企業を守ることにより、経営者だけでなく、職場環境を改善し、結果的には社員側の利益も守ろうとしている。「相談は気軽に受け、受けた相談が混乱している悩みを整理し、建設的な提言をし、今後何をすべきかを示すことです」と金森弁護士。そして「金森に話をしただけになつた」のひと言がうれしいという。司法試験で両親に「雲の上の存在」と映つた弁護士が身近な法律の相談者として活躍している。

金森 将也（かなもり まさや）

二〇〇〇年十月、司法試験合格。〇一年三月、上智大学法学部法律学科卒業。同年四月、最高裁判所司法研修所司法修習生。〇二年十月、名古屋弁護士会（現・愛知県弁護士会）登録。〇三年四月、つばさ総合法律事務所（弁護士法人アクシスの前身）設立。